

「がん哲学」 & 「がん哲学外来」の 始まり、意味、目的



樋野
興夫

順天堂大学 医学部 病理・腫瘍学

はじめに

筆者は、顕微鏡を覗いてがんの研究をする病理学者であるから、患者さんと接する機会はほとんどない。しかし、患者さんのがん細胞を見ていると、「この人はどういう人生を送ってきたのだろう」「どういう最期を望んでいるのかなあ」と、いろいろと考えてしまうことが多かった。臨床医は忙しすぎて、そんなことを考えている暇はないだろう。そこで、病理学者の筆者が「がん哲学外来」ということを始めた。

患者さんたちと接していると、肉体的な痛みの緩和よりも、心の安息を望んでいるように感じた。なぜなら、死のすぐ隣にある病いと向き合うには、今まで考えもしなかった自らの生を正面から問わざるをえなくなるからである。その時、医者や治療に関わる者に何ができるかという、専門知識をもつ者として、患者さんが自分の生や死の意味を掘り下げていく支援があると思う。「がん哲学」はそのために生まれた。科学としての「がん学」と、いかによく生きるかを探究する「人間学」をドッキングさせたものである。「がん哲学外来」は「がん哲学」を実践する場として、始まった。

実際に「がん哲学外来」を始めて痛感したのは、患者さんが自分のがんや人生について安心して話せる場が少ないということだ。本来は、主治医がいちばんの相談相手となるべきだけれど、患者さんも主治医が忙しいことは十分にわかっているし、何を聞けばいいかも分からない。医者の方も、気軽に質問できる雰囲気をつくれないのだろう。悩みを聞いてもらうどころか、主治医との関係に悩む人も少なくない。そのすき間に、「がん哲学外来」は存在している。敷居の低い、なんでも語れる場としてつくったのである。

はじめに言葉ありき

最近では、がんが治る病いになってきたこともあって、告知する傾向にある。というよりむしろ、重く言っているくらいである。「あなたの余命はあと3カ月」と簡単に宣告する人もいる。しかし、余命はあくまで確率で、確実ではない。「あと3カ月」という言葉を気にしすぎて、3カ月を待たずに亡くなることだってある。エビデンス（科学的根拠）を強調するあまり、治療が萎縮してしまうような面も出てきている。学問的に、“患者さんの予後は大体70パーセント”くらいは類推できるものの、個人差があるのだ。少なくとも、その人自身をみようとしないと、患者と医者という対等な人間関係は築けない。人間的に対等というのは「がん哲学」の基本姿勢でもある。

⑦患者さんが自らを解放する力

「がん哲学外来」には、末期がんの人も、再発・転移を繰り返している人もいらっしゃる。たとえがんのステージが同じでも、悩みは違ってくる。治療に対する悩みなのか、人間関係で悩んでいるのか、死への不安なのか、とさまざまな悩みがある。一概にがん患者といっても、人それぞれなのだ。たとえば、余命宣告をされて、終わりだと思ってしまう人もいれば、静かに受け入れる人もいる。同じことを言われても「反応」が違う。その「反応」に、人生観や死生観などが出てくる。患者さんと話しをしていると、「きっと仕事に打ち込んでこられたのだろうなあ」というふうには、その人自身を感じることができるわけだ。これは、病理学の基本である。病理学は、細胞の風貌を見て、がんであるか否かを見極めるが、言い換えれば、「風貌を見て心まで読む」学問なのである。

「がん哲学外来」では、まず患者さんをみて、どういう苦しみを抱えているのかを察する。察するにはそれなりの時間も必要であるし、こちらが^{ひまげ}暇気でない駄目だ。暇そうにするというのは、脇を甘くして相手につけ入る隙を与えること。そうしないと、患者さんの心は開かない。そして、患者さんの心に一步踏み込んだ「偉大なるお節介」をやかないと。ちょっと難しい言葉を使うと、今までのがん医療は「救済の客体」として行われてきた。本来は、こちらから主体的に隣人になろうとしなければならない。特に、がん患者さんたちは、人間としてどう生きるかという悩みを抱えている。そうした深い悩みは、「病人」に対する「心のケア」だけでは解消されない。「がん相談」は、患者さんを「救済の客体」として扱っているような気がする。「がん相談」と「がん哲学」の違いは、がん患者を「救済の客体」から「解放の主体」にしていこうとするところだろう。相談を受けるだけでは、傾聴だけでは駄目だと思うのである。対話がないと。私は、患者さんを“話を聞いてもらう”立場から、“自分の力で自らを解放していく”方向へと導きたい。自分という存在そのものを問う領域は、やはり自分の中で深く深く考え抜いてやるしかない。私は、そのための「種」、つまり言葉を渡すようにしている。

⑧おわりに

基軸になる言葉があれば、そこから論理が展開でき、思考を深めていくことができる。まさに「はじめに言葉ありき」である。患者さんの風貌を見て、その人の人生や悩みを感じ、尊厳に触れるものは何かと探りながら言葉を渡していく。患者さんは人間としての悩みを抱えているわけであるから、健康であるとか病気であるとかは関係ない。実際、遠慮しない言葉が患者さんの心に届くのである。「種」を受け取ってくれたかどうかは、顔を見れば分かる。脳の引き出しを必死で引き出して言葉を絞り出していると、必ず受け取ってくれる言葉があるのだ。患者さんの表情や態度が、来た時と帰る時で変わっていなければ意味がない。患者さんの風貌の変化が、「がん哲学外来」の目的を達成できたかどうかのサインだと思っている。